

## さんむのふるさと散歩

NO.38

## 山武林業②

江戸時代、陸岡村埴谷（現山武市埴谷）は江戸と銚子を結ぶ銚子街道の宿場町として栄えていました。

蕨家は、街道を行き来する品物の取次ぎや造り酒屋を営んでいました。その一方で山林経営の他、代官もつとめる家柄でした。

そんな蕨家に長男真一郎が明治九年、次男直治郎が明治一二年に生まれました。



蕨 真一郎

この時代の日本は、今年NHKで放映中の「竜馬伝」で坂本竜馬が夢見たアメリカ・ヨーロッパと同じような近代国家をめざして歩み始めた頃です。

近代国家の建設のためには役所などの建物や鉄道・道路・港などのさまざまな施設を整備しなければなりません。その整備を行うには木材など多量

の建築材が必要とされたのです。

当時の陸岡村を含む近隣の村々は、江戸時代から山武杉にみられる建築材の生産地でしたので、首都・東京に近い地の利を生かして、盛んに出荷していました。

当時の様子を真一郎は、著書『民間造林の中より』で鎮守の森の皆伐や、「伐つては金、伐つては金、金が一番じゃ」といつて伐採して跡地を畑にした地主がいたと嘆いています。

当時、開墾がさかんになる一方で、造林が一時停滞していたようです。

江戸時代までの目的に合わせて少量の木を伐り出す方法（択伐セツバツといいます。伐採した個所に植林し、継続的に森を維持する管理方法です）と比べて、幕末・明治維新当時の伐採方法は、一度にひと山すべて伐採する皆伐式が多かったのです。

伐採された跡地は地面が乾燥して、春先の季節風が強い時期になるとひどい砂嵐のため外を歩く時、目を開けて前を見ることができなくなりました。

今でも春先になると山武から八街の畑作地帯にかけて発生する砂嵐は、このような山林伐採と畑の開墾が原因だったのです。

話を元に戻しましょう。熱心な林業家で山林を大事に育成した父重三郎の姿をみて成長した真一郎・直治郎の兄弟は、荒れ果てた山林の姿に深い憂いを憶えたことでしょう。

真一郎が、松の名産地で有名な長野県の本曾地方を訪ねた際に、老木が鬱蒼うっそうとして茂るさまに感動して、その風景をかつての手入れの行き届いた埴谷の造林地と重ね合わせて、その再生の目標にしたと言われています。

真一郎は明治四四年、私財を投じて「埴岡農林補習学校」を設立し、山武杉の造林法の研究及び普及・後継者育成に情熱を傾けました。

真一郎は校長に就任し、学校の経営にあたる一方、教科を受け持つて教壇に立ち、また実習林で熱心に指導を行いました。

直治郎も学科を受け持ち、学校経営を支えました。直治郎は真一郎の死後、校長を受け継ぎ林業後継者の育成に尽力したのです。

そして昭和二二年、学制改革による旧制学校の廃止と直治郎の死により埴岡農林学校は廃校となりました。



埴岡農林学校

埴岡農林学校は、廃校までの36年間に多くの有為な人材を世に送り出しました。

同校の卒業生達が、真一郎・直治郎の遺志を受け継ぎ大正から昭和にかけて、山武林業の担い手となったのです。

前号から続いて山武林業についてお話ししてきましたが、市民の皆さんは山武林業は森を見るくらいしかなじみはないなと思いませんか。

最近では、ハウスタストや環境ホルモンの問題から、杉のむく材が見直されつつあり、一般の住宅の他、山武市歴史民俗資料館の内装や成東東中学校の改修工事にも使用されています。

資料館の展示室は、赤味を帯びた山武杉の板材に囲まれています。杉からほのかな木の香りがたたい、温もりを感じるができます。

皆さんも山武杉の温もりを感じに資料館にいらしてみませんか。 ※「埴岡農林補習学校」は大正四年に「埴岡農林学校」と改称しました。

## 問 歴史民俗資料館

☎ (82) 2842